

ポール・シャムレーのステュアート研究

渡 辺 邦 博

目 次

- I. ポール・シャムレーのステュアート草稿研究——草稿類を中心として
- II. 印刷物
- III. 資料群の散逸の問題
- IV. 小 括

I. ポール・シャムレーのステュアート草稿研究——草稿類を中心として

ポール・シャムレー著『サー・ジェイムズ・ステュアートに関する資料 (*Documents relatifs a Sir James Steuart*)』(ストラスブール, 1965年)は、少なくともわが国のジェイムズ・ステュアート (James Steuart, 1713-80) の研究においては然るべき位置を与えられてこなかったと言えるかもしれない。なぜなら、後述の様なステュアート研究の進展にもかかわ⁽¹⁾らず、本書に対する書評すら未だに発表されていないように思われるからである。もちろんそ⁽²⁾うした背景には、従来のわが国の経済学史研究がどちらかと言えば英語圏の文献に偏っていたことを別にしても、ケインズがステュアートを読んでいたなどと言う著者の特異な見解にも責任の一端がなかったとも言えなくもない。けれども、ステュアートの研究がようやく成熟を見せてきている現状を考える時、本書に対するなんらかの評価を行なうべき時期に来ていることも確かであり、今回筆者が非才をも省みずフランス語文献に取り組んだような次第である。以下の作業は筆者の関心にかかわる限りでのシャムレーの紹介となるだろうから、本来の書評とは言えないが、私としてはシャムレーの胸を借りることによってステュアート研究の課題が明らかにできれば、満足することにした。

一般的に言って本書の成果は、その1年後に公刊された *Scottish Economic Classics Sir*

(1) ステュアート研究の先駆者の一人ストラスブール＝ルイ・パスツール大学のポール・シャムレーは、1992年9月24日に逝去した。享年80歳。後述のようにわが国では主としてヘーゲル研究において知られた人物であったように思われる。主著の一つであった『ステュアートとヘーゲルにおける政治経済学と哲学』(1963年)を発展させた論文が、2回にわたり原田哲史氏によって四日市大学論集に翻訳・掲載されている(原田〔1990〕〔1992〕)が、主著の方も是非とも完訳を期待したい。水田 洋先生を通じて原田氏からはシャムレーの死亡にかかわる情報を始め上記の翻訳まで恵与して頂き、望外のご教示を得た。両先生に対し感謝したい。

(2) わが国の経済学史学会は1979年南山大学における大会にシャムレー氏を招いたことがある。

James Steuart *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, edited and with an introduction by Andrew S. Skinner, Edinburgh and London, 1966. に発展的に吸収された感があるが、問題はどの程度までそれが遂行されたのか（またはされなかったのか）である。

さて、そうした状況において、本書に対する唯一の言及とも見なせる小林 昇教授の見解を整理すると、以下の3点になる。すなわち、

1) 著者による文献的検討、とくにステュアートの主著『経済の原理』の成立史を明らかにした点。ことに、『原理』第1・2編の3種の原稿、すなわちレイディ・メアリ・モンタギューへの献呈清書稿、バーデン辺境伯への献呈清書稿、『コルトネス文書』Coltness Papers（以下CMSと略記することがある）中の著者自用の原稿を比較検討し、それがケネーの『経済表』（1760年）とは独立に成立したことを確定したこと。

2) ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス所蔵の『原理』初版への書き入れ本を調査したこと。

3) シャムレーの前著『ステュアートとヘーゲル』（1963年）以来の思想史研究によってステュアート関係資料の理解を行なっていること。

以上の3点である。⁽³⁾ 小林教授が『原理』形成史の詳細に対する貢献を重視されるのは当然であるとしても、詳細は行論のうちに明らかとなるが、それは本書の貢献の一半であるように思われる。

まず本書の内容をその目次によって見ると、次のようになる。

序文

第1部 ドキュメントの分析

第1章 資料の状態

第1節 手稿類

§ 1 ステュアート伝に関する手稿

I. コルトネス文書

II. チャーマーズ文書

III. ステュアート文書と政府関係文書

IV. 書簡の散在した部分

V. エルコのジャーナル

§ 2 『原理』に関する手稿

(3) 小林 [1989], 335—336ページを参照。

- I. コルトネス文書
- II. レイディ・メアリへ献呈されたMS
- III. カールスルーエのMS
- IV. Tabrie のMS

第2節 印刷された文献

- § 1 書簡類
- § 2 伝記的説明
 - I. 死亡広告
 - II. 一般的伝記記事
 - III. 伝記の概要
 - A. バハンの書いたもの
 - B. ジョージ・チャーマーズ
 - C. コルトネス・コレクション

第3節 失われた資料と保存された資料の欠落

- § 1 失われた資料の問題
- § 2 現存資料の価値

第2章 ステュアートについての新たな資料

第1節 伝記的要素

- § 1 ステュアートとジャコバイト
 - I. ステュアートのジャコバイト主義への参加
 - II. ステュアートと反乱
 - III. 亡命からの帰還
 - IV. 1746年以降のステュアートのジャコバイト主義
- § 2 ステュアートとニュートン主義
 - I. 解釈の問題
 - II. ステュアートとニュートン
 - III. ステュアートとラムゼイ
 - IV. ステュアートとフェヌロン
 - V. ステュアートと Oetinger
- § 3 ステュアートの人格
 - I. 主要な傾向
 - II. 転換
 - III. ステュアート, スミス, ヘーゲル

第2節 『原理』の歴史に関する資料

§ 1 『原理』の展開（仕上げ）

I. 被った影響——フィジオクラシーの役割

A. 外的資料

B. メルシ・ド・ラ・リヴィエール

C. ミラボ

D. バーデン辺境伯

II. 著作の連続状態——レイディ・メアリへの献辞

§ 2 『原理』の影響

I. ステュアートと彼の時代のイングランドの政治経済

II. ステュアートのヨーロッパ大陸への影響——ステュアートとヘーゲル

第II部 テクスト

A サー・ジェイムズ・ステュアートに関するテキスト

I. エルコのジャーナルの抜粋

II. MS 1 の抜粋

III. MS 1 とコルトネス文書

IV. エリザベス・ミュアからカルダーウッド・ダラム夫人への手紙

V. Tabrie の手稿

B サー・ジェイムズ・ステュアートのテキスト

I. サー・ジェイムズ・ステュアートからその義兄弟トマス・カルダー・ウッドへの手紙

II. レイディ・メアリ・ウォルトリ・モンタギューへの献辞

III. バーデン辺境伯への献辞

IV. 1777年10月14日の小麦価格についての手紙

C ステュアートとヘーゲルの関係に関するテキスト

I. ローゼンクランツの証言

II. 『国家経済』と青年時代の著作

III. Realphilosophie におけるスミスとステュアート

結論

一見して明らかなように、これは様々なドキュメントの分析にあてられる第1部と、シャムレーの発掘したドキュメントそのものからなる第2部によって構成されているが、本稿での論評は前者に重点を置き、紹介は本書の節別に従うことにする。第1部は3節から構成される第1章と、2節から構成される第2章からなるが、そこで取り扱われた問題を順に挙げると、1) ステュアートに関するいわゆる手稿類、2) 同じく印刷物、3) 以上2種類の資料群の散逸、4) 主としてステュアートとジャコバイティズム、ステュアートとニュートンの関係を扱った伝記的

部分、5)ステュアートの『経済の原理』の形成史とその反響を扱った部分からなっているので、この構成の順に検討を加えて行くことにしたい。

1)ステュアートに関するいわゆる手稿類

以下のような手稿類の中には研究史上すでに消化されているものも少なくないし、比較的容易に利用できるものとそうでないものもある。

詳細に言えば、ここに言ういわゆる手稿には、A)ステュアートの伝記に関する手稿群とB)『原理』に関する手稿類の2種類が含まれているが、前者＝ステュアート伝に関する手稿から始めたい。

A) ステュアート伝に関する手稿群

検討項目は『コルトネス文書』、『チャーマーズ文書』Chalmers Papers (Chalmers MSと略記することがある)、『ステュアート文書』Stuart Papers と政府関係文書 State Papers, 書簡 Correspondence, 『エルコの日誌』The Journal of Elcho の5つである。

<『コルトネス文書』>

グラスゴウの東南十数キロ、ラナークへの途中にステュアート家の旧所領コルトネスがある。⁽⁴⁾『コルトネス文書』は、所領コルトネスに関係する諸文書の集成『コルトネス・コレクションズ』(そこには後述するように『コルトネス文書』中にあるA. キップスによる詳細なステュアート伝の草稿を印刷物にした「ステュアート伝」も含まれている。CCと略記。)の一部をその構成部分とする、われわれのステュアートとその家系に関する草稿類⁽⁵⁾の集合であるが、シャムレーによるとその中には「ステュアート伝」に関する4つのドキュメントが含まれている。

①ステュアートの死(1780年)と彼の妻の死(1789年)の間に書かれた“Memoirs for the life of Sir James Steuart-Denham of Coltness ect., by a well informed friend”と題する手稿。この著者はアーチボルド・ハミルトン Archibald Hamilton とされている。⁽⁶⁾⁽⁷⁾最も

(4) 山崎怜「キャンバスネイサン」, 小林〔1977〕の付録を見よ。

(5) 渡辺〔1994〕, 40—41ページを参照せよ。

(6) チャーマーズ〔1805〕はこの根拠を Dennistoun D. D.〔1842〕の384ページとしているが、383ページの誤り。念のために CC のあげる3つの賛辞を紹介すると、「サー・ジェイムズ・ステュアートの業績と人格に対してささげられたいくつかの賛辞は『コルトネス・コレクションズ』において然るべきところを与えられる権利がある。第一のものは彼の得がたい友人、ロンドン、グレート・カンバーランド・ストリートの故アーチボルド・ハミルトン氏による素描であるが、ウエスト・バーン家と彼の関係は、アンダースンの『ハミルトン一族』の442ページに見出される。第二のものは、彼の息子の願いによってウエストミンスター寺院にウィルトンによって建立された記念碑の上の彼の評判に対する献辞である。第三のものは、故ジョン・ダンロップ氏の洗練された文体によってコルトネスのあずまやのためにフランシス夫人の立案になる銘文となるはずだったものだったようであるが、そこは二人の若いころの輝かしい愛の時も、そしてまた晩年の円熟した平和の中にあっても、愛の絆で結ばれた夫婦のお気に入りの所としてすでに触れられたところである。」(CC, p. 383) ↗

古いステュアート伝と推定されるこれをシャムレーは MS1 と称する⁽⁸⁾。

②キップス博士の裏書きのある MS2。これはステュアート將軍からジョージ・チャーマーズ宛ての書簡 (in BM) によって確認される。

③いくつかの書簡。1743年4月23日付けのステュアートからサザランド夫人への1通の手紙。ステュアートから息子への3通の書簡、コルトネス発1768年2月17日付け、1770年5月20日付け、ロンドン発3月23日付け。Aindry 発 Madame Destuart, Guissalle からの 1750年9月27日付け書簡⁽⁹⁾。

④ステュアートの赦免関係書類。

以上のうち①については、両草稿とも今日ではマイクロフィルムで利用可能であるが、一方の著者とされるアーチボルド・ハミルトンが従来の研究ではそう明らかにされている人物とは言い難く、“An attempt”と同様に十分な研究がほどこされていない。かなりのヴォリュームのある②は『コルトネス・コレクションズ』の中に活字化されており、公刊時期はチャーマーズ [1805] よりも遅いけれども、ステュアート夫人の存命中に作成されたもので、前述スキナー [1966] によっても大いに利用されているものの草稿である。③のうち筆者が確認できていない March 23, 1770 と Sept. 27, 1750 以外は『コルトネス文書』の中に存在する⁽¹⁰⁾。④は現在のところ筆者はこの『コルトネス文書』中に確認できていない。

<『チャーマーズ文書』>

Whitehall の国庫官吏であり古物収集者であったジョージ・チャーマーズ (George Chambers, 1742-1825⁽¹¹⁾) が収集し、エディンバラ大学図書館に保存されている文書。チャーマーズ同様に古物収集者でありエディンバラにおける彼の文通相手だったアリグザンダー・ステンハウス (Alexander Stenhouse?) とのやり取りを含む⁽¹²⁾。

いわゆる『ステュアート 著作集』*The Works, Political, Metaphysical and chronological of the late Sir James Steuart of Coltness, bart.*, 1805の最終巻に収められた「ステュ

\\(7) この外、CMS には “An attempt to delineate the person and character of Sin James Steuart of Coltness, Bart., by one who had the honour and happiness of his friendship and confidence” と題するもう一つの手稿も存在する。

(8) 本書の第二部Aにステュアートの人柄に関説した部分が復刻されている。

(9) 拙稿 [1994] 44—45ページを参照。

(10) ただし April 23 1743 は Aug. 23 1743 ではないかと推定される。スキナー [1966] の XXVIII の note 34を参照。

(11) チャーマーズについては、そのいずれにもステュアートの『著作集』に関与した旨の記述はないが、Chambers [1855] や Anderson [1870] を参照せよ。

(12) おそらくシャムレーを導きの糸としつつ、このチャーマーズ文書を用いてステュアート研究を実際に行なわれたのは川島信義教授が最初であろう。以下に紹介するいくつかの資料に実際にあたられたのも教授である。

アート伝」の著者がチャーマーズであり、この『著作集』の事実上の編集者もチャーマーズであるらしいと推定できる証拠を、この文書は含んでいる。シャムレーはここに以下のような10点の資料の存在を指摘する。

①1792年に *Edinburgh Magazine* (?) で公刊されるべき草稿をもとにした Buchan によるステュアート Memoirs のコピーをチャーマーズに紹介する、Dec. 27 1787 付けステンハウスの手紙⁽¹³⁾。

②バハンへの打診のためのチャーマーズとステンハウスのやり取り。

③ステュアートが大陸亡命中に同行したとシャムレーが推定する Andrew Hay, Rannes からの手紙の抜粋を伝える、James Duff? からチャーマーズへの手紙 Jan. 12? 1788。

④ステュアートの妹たちのうち Poltown の Thomas Calderwood に嫁した1715生まれの長女 Margaret (-74) には⁽¹⁴⁾、4人の子供たちがいたが⁽¹⁵⁾、ステュアートにとっては姪にあたるその長女 Anne Calderwood は Largo の James Durham に嫁した。そのカルダーウッドのダラム夫人は、1777年10月14日付けステュアートの小麦価格に関する手紙を、チャーマーズに紹介した⁽¹⁶⁾。ダラム夫人は、ステュアートのおばにあたるミューア⁽¹⁷⁾、つまりカルドウェルのミューアがまだ存命であることにも触れている。

⑤Elizabeth Mure からカルダーウッドのダラム夫人宛てのステュアートに関する手紙、1787年12月20日付け。ミューアとはミューア男爵⁽¹⁸⁾の妹で、ステュアートはその従兄にあたる。これは本書の第2部のAに復刻されている。

⑥ステュアートに関するチャーマーズの1789年の抜粋ノート。

⑦ステュアートが大陸時代の住居などについて George Colebrooke⁽¹⁹⁾ の娘に宛てた4通の手紙。

⑧1780年10月にステュアートとジョージ・コールブルックとの間で交わされたフランス財政問題をめぐる1通の書簡。

⑨バハンのものと推定される “Slight-Sketches of Portraits of Sir James Steuart and

(13) 後述のようにバハンは、*Edinburgh Magazine* と『アーキオロギア・スコティア』とに2つのステュアート伝を寄稿した。

(14) ついでに言えば、1717年生まれの次女 Agnes はバハン伯 Earl of Buchan に嫁し、1723生まれの三女 Marion はクリングレティ Cringletie のアリグザンダー・マリ Alexander Murray に嫁した。SN による。Dennistoun [1842] *Coltness Collections* pp. 386ff も参照。

(15) William, James, Anne, Margaret の4名、前述 Dennistoun [1842] CC pp. 398-401を参照。

(16) この手紙は本書の第2部のBに復刻されている。

(17) Dennistoun [1842] CC の p. 296を参照。ミューアについては不詳であるが、CC の77ページに Anna Stewart なる人物が登場するが、この人物がそうであるのかいなかの確証はない。

(18) ミューア男爵、David Hume の盟友、1764—5年にかけてグラスゴウ大学の rector を勤める。1761年スコットランド財務裁判所(1856年以降に統合、Robinson [1985] を参照のこと)の判事に任命される。1776年没。

(19) チャーマーズ文書の中の説明では、東インド会社頭取となっている。

Dr Adam Smith” 2つの草稿。ステュアートに関する素描はアーチボルド・ハミルトンの伝記の冒頭の再現である。

⑩ ウェストミンスターにあるステュアートの碑文の英語原文。

①と②は現在マイクロフィルムの形で判読できるものである。

③ ここに言う James Duff なる人物については全く不詳であるが、②同様『チャーマーズ文書』の中にある。

④ スキナ編の『原理』付録に収められているが、『チャーマーズ文書』にありマイクロフィルム^①の形で判読できる。本書第2部のBに復刻。

⑤ 『チャーマーズ文書』にありマイクロフィルムの形で判読できる。

⑥ 『チャーマーズ文書』にありマイクロフィルムの形で判読できる。

⑦ 『チャーマーズ文書』にありマイクロフィルムの形で判読できる。

⑧ 『チャーマーズ文書』にありマイクロフィルムの形で判読できる。

⑨ ①で述べたようにこれも『チャーマーズ文書』にありマイクロフィルムの形で判読できる。

⑩ 管見の限りこれはマイクロの形での『チャーマーズ文書』の中には存在しないようである。

<『ステュアート文書』『政府関係文書』>

ウィンザーにあるステュアート文書 Stuart Papers の中には、ステュアート宛になる19通ステュアート宛での12通以外にステュアートへの言及を含む第3者間の手紙が存在するが、これらには体系的分析が必要である。

また Public Record Office に保存されている政府関係文書 State Papers にはいわゆる「反乱 Rebellion」にかかわるステュアートの役割を物語る部分がある。これらはステュアートの政治的立場に関する資料と推定されるので、本稿ではこれ以上の詮索はしない。

<書簡の一部、マッキー教授>

以下のものをシャムレーは書簡の散逸した要素と類別している。

① 若きステュアートがスペインから恩師 Charles Mackie に宛てた1737年3月19日付けの⁽²⁰⁾手紙。

② 嘆願の目的で書かれた、2通はステュアート夫人の、1通はステュアート本人のブラッセル^②発1756年1月20日付けの手紙。BM所蔵。

③ ステュアート将軍からチャーマーズに宛てた、『ステュアート著作集』に関する1804年4

(20) レイニング文書にあり。シャムレーはこの文献の存在について情報を得たとして、本書の翌年に『原理』の縮約版を出すことになるスキナー^③氏を明示しているが、隔世の感がある。これは Historical Manuscripts Commission [1925], vol. 2 の247—8ページに復刻されている。

月4日付けの手紙。⁽²¹⁾BM所蔵。

④S. R. Sen が発見したステュアートから東インド会社宛ての書簡, India Office Library⁽²²⁾所蔵

⑤National Library of Scotland に存在するはずの書簡類。⁽²³⁾

およそ書簡とは必ず相手あつてのものである。今後ステュアートについての基礎資料を発掘する場合には、書簡類の探索が重要な役割を演ずると思われる。シャムレー自身が述べているように、ステュアートに関する重要な資料の発見が最も期待できるのはNLSである。スキナ教授も筆者にそう述べられた。

残念なことに以上の書簡類は、今日マイクロフィルムでならほぼ一括閲覧可能な『コルトネス文書』には収録されていない。

<『エルコの日誌』>

ステュアートの義理の弟エルコ卿 (David of Weymess) はステュアート夫人 Frances の実弟であつたが、⁽²⁴⁾2種類の著作を残した。第一は後年 Evan Charteris によって1907年に出版された英文の①いわゆる「反乱」の歴史、⁽²⁵⁾第二は仏文による「反乱」の記録で、1948年その抜粋が Roxburg Club 記念出版に、Henrietta Tayler 編 *A Jacobite Miscellany*, Oxford として翻訳出版された②『エルコの日誌』*The Journal of Lord Elcho* ⁽²⁶⁾である。

いずれの文献もステュアートに関する情報を豊富に収録しているわけではないが、②には、当時頻繁に大陸に行き来した第5代エルコ卿 (1721—87)⁽²⁷⁾との、すでにグランド・ツアーに先発していたステュアートとの出会い、ローマでのジェイムズⅢやチャールズ・エドワードとの出会い、その妹 Frances Wemyss とステュアートとの出会い、チャールズ・エドワードのスコットランド上陸、大陸亡命中のステュアート夫妻と彼のフランスでの出会い、チュービンゲンに移動した夫妻の様子、バーデン辺境伯と夫妻との出会い、7年戦争の渦中にスパーで捕

(21) 川島 [1975] の37ページには4月11日付けの手紙が紹介されているが、それとの関係は不明。

(22) Sen [1957], p. 155を参照。またこれもマイクロの形で判読可能。

(23) NLS にはステュアートに関する資料が未発見のままで存在していると思われる。今後現地で時間をかけたステュアート研究を行なえる者はチャレンジすべきところかもしれない。

(24) 例えば Steuart [1805] 第6巻に集録のチャーマーズによる「ステュアート伝」を参照。岩波文庫判『原理』①の21ページ。

(25) *A Short Account of the Affairs of Scotland in the years 1744, 1745, 1746*, by David, Lord Elcho, Printed from the Original Manuscript at Gosford, with a Memoir and Annotations, by the Hon. Evan Charteris, Edinburgh, 1907.

(26) 『日誌』自身は1721年8月から1783年4月までをカヴァーし366ページにも及ぶ草稿らしいが、本書の第2部の筆頭にその抜粋が復刻されている。

(27) Anderson [1870] による。また本書97ページに採録された復刻の記述によれば、チャールズ・エドワードの年齢をエルコ自身が1歳年上と記している。

われの身となったステュアートの不運などが綴られている。

これまでのわが国の研究ではいずれの資料もあまり注目されてこなかったように思われる。

以上でようやくいわゆる伝記的手稿群についてのシャムレーの成果を紹介し終えたので、次に『原理』に関する手稿類に移る。

B) 『原理』に関する手稿類

今日ではある程度常識となっているが、『原理』初版の草稿は3種類存在する。結論を先に言えば、それらをシャムレーはそれぞれ MSA, MSB, MSC と呼んでいる。

1. 『コルトネス文書』中にある草稿。

『コルトネス文書』の中には『原理』それ自体に直接かかわる草稿と、言わば間接的に『原理』に関係する草稿が存在するが、まず、

①著者ステュアートが『原理』の初版(1767年)公刊の土台としたと見なされる Bk. I と Bk. II の草稿があり、それが言うところの MSA である。

②1763年10月の日付けを持ち Barrington 宛ての書簡の体裁を取っている Bk. III の草稿。⁽²⁸⁾

③本文の中の一つに1761年7月17日 Dort. の記述のあるオランダ鋳貨に関するノート。⁽²⁹⁾ シャムレーは『原理』初版の序文 p. Vii を引用しながら、そこでステュアートのノートを基礎とした研究習慣を指摘し、このオランダ鋳貨論こそはその証左だとしている。⁽³⁰⁾

④1780年に Goguel と Frances 夫人との間で交わされた『原理』フランス語版に関する4通の書簡。⁽³¹⁾

2. いわゆる MSB

Lady Mary Wortley Montagu へ献呈された Bk. I と Bk. II の手稿。シャムレーはこの献辞を実際に公刊された『原理』初版の「序文」のアウトラインと見なすが、1759年8月11日の日付けがある。本書の第2部Bに復刻されている。

3. MSC

『コルトネス文書』に保存されている Goguel の手紙によると Baden 辺境伯は著者ステュアートと旧知の間柄であり、『原理』の草稿を1部所蔵していることになっているが、これはカールスルーエの Landesbibliothek に現存する。⁽³²⁾ 2冊からなる手稿の2冊目にチュービン

(28) 拙稿〔1994〕の45—50ページを参照。

(29) 拙稿〔1994〕の pp. 45—49を見よ。

(30) ここでシャムレーの使用した『原理』初版は、1957年のわが国経済学史学会による復刻版である。

(31) 拙稿〔1994〕の pp. 43—44を参照。

(32) 献辞が本書の第2部Bに復刻されている。

ゲン、1759年8月31日の日付けがある。

さらに、London School of Economics には、

4. ステュアート自身の筆跡を含む訂正のはいった初版『原理』が存在する。

次にこれまでのものとはいささかニュアンスが異なるが、

5. エディンバラ大学の Laing 草稿⁽³³⁾に保存されている Tabrie の草稿。

これは1933年 E. M. Fraser によってその一部が公刊 (*Revue de Litterature Comparee*, XIII, 1933, 506 ss) されたが、Steuart が Charles Edward と誤解されたため、その意義が看過されていたものである。若き Steuart が大陸での旅を共にしたこの手稿の受け取り人 James Carnegie of Boysack は、1762年他のジャコバイトたちと共に Sancerre-en-Berri に住み赦免を求めているが、1768年9月5日55歳でその地に没した。つまり彼は1713年生まれのスチュアートと同年だったことになる。ここに言う Tabrie の手稿は、1749年11月20日付けの Jean Francois Tabrie からアングレーム近くの Guissalle にあったステュアートの住いに送られた Carnegie 宛ての書簡形式の草稿のことである。⁽³⁴⁾この本文は Tabrie 自身による Tellemachus のラテン訳の苦心談を Carnegie に述べた後で、古典を中心としたその後の7点にわたる執筆計画を述べている。この資料が『原理』形成史上いかなる意味を持つのか今の私には判定しがたい面もあるが、少なくともこの日付けの時点においては書簡の受け取り人であった Boysack と共にステュアートはフランスのアングレーム近傍に居を定めていたことは確かなことと思われる。

以上でステュアート伝と『原理』に関する手稿類の検討については一応の区切りができたが、手稿類自体がステュアートの伝記に関するものと、『原理』に関するものに別けられるなかで、続いてシャムレーはステュアート伝について3項目(Ⅱ+Ⅲ+Ⅳ)にわたって検討を行っており、『原理』の形成史については後に回している。

II. 印刷物

ここではすでに印刷状態になっている資料が検討されるが、それはA) 各種の書簡類と、B) 18世紀半ばまでに作成されたステュアートの伝記の2種類に分けられる。

まず、

(33) レイニング草稿とは、David Laing (1793-1878) の遺贈になるもので、膨大な文書、書簡、その他のドキュメントからなるが、歴史的ドキュメントのみが上記のように2巻本で1914-25年に公刊された。

(34) 本書第2部のA, pp. 118-125に復刻。

A) 印刷された書簡類には以下の3種がある。

①ステュアート自身からの3通の手紙。

ドイツの戦況に関してステュアートからのフランクフルト発1756年12月26日付けの手紙。⁽³⁵⁾

②ステュアートからデイヴィッド・ヒューム宛て1767年の手紙。⁽³⁶⁾

③いわゆるメアリ・ウォルトリ夫人とステュアート夫妻との間の『書簡集』に収録されている、ステュアートからの Seville 発1737年3月5日付けの手紙。⁽³⁷⁾ シャムレーによるとこの書簡は前述のマッキー宛てのそれよりも重要である。なぜならステュアートがグランド・ツアーの途中で、スペインを襲った飢饉に注目したことはその後の彼の著述の出発点となったと見なしうるからである。

④1746年付けのステュアートからバハン伯 Henry David 10th Earl of Buchan 宛ての書簡。これは *Letters and Journals of Mrs Calderwood of Polton from England, and the Low Countries in 1756*, edited by A. Ferguson, Edinburgh, 1884XLIX ss. に採録されている。⁽³⁸⁾

⑤ステュアートからいとこ(?)のミュー男爵宛てに出された4通の手紙。これはいわゆる『コルドウエル文書』Edited by William Mure, of Caldwell, *Selections from the family papers preserved at Caldwell*, Maitland Club Publications No. 71, 1854. に収録されている。⁽³⁹⁾

⑥前述の『メアリ・ウォルトリ夫人著作書簡集』にはステュアート夫妻宛の書簡が20通収録されている。(The *Letters and Works of Lady Mary Wortley Montagu*, London, 1893, Standard Edition, vol. II, 322 ss.) シャムレーによると本『著作書簡集』の初版は日付けの誤りがいくつか存在するようである。

以上のようなステュアート関係書簡を裏付ける同時代の証拠として用いられるのは、⑥収録の書簡類である。⁽⁴⁰⁾

(35) W. S. Taylor & J. T. Pringle ed., *The Correspondence of William Pitt*, London, 1840. に採録。

(36) Burton [1849] に収録。

(37) Dunlop [1818] の p. 150-154 に採録、また本書の第二部Bに復刻されている。

(38) バハン伯の息子が David Stewart Erskine, 11th earl of Buchan, 1742-1829, ステュアートの次女 Agnes の息子でステュアートにとっては甥にあたる人物である。彼は1792年に *Transactions of the Society of Antiquaries of Scotland* に *Memoirs of the Life of Sir James Steuart Denham*, 1791年9月14日と22日に *The Bee* に *Life of Sir James Steuart Denham* を掲載した。Anderson [1870] の Erskine の項を参照。

(39) ステュアート関係の書簡が少なからず収録されている『コルドウエル文書』にはステュアートからミュー宛てには、少なくとも1764年2月4日付け、1764年日付け不明、1766年12月18日付け、1773年12月10日付けの書簡がある。

(40) 一番古い例としてステュアートが告白したと言われるの文体の例がある。シャムレーは Abgus/

B) 18世紀半ばまでに作成されたステュアートの伝記

ここではいわゆる死亡広告の類、人名辞典の項目、比較的まとまった「ステュアート伝」の3種類の資料が検討される。まず、

①死亡広告には、*The Scots Magazine*, 1780, 623-624. *The Gentleman's Magazine*, 1781, 28-29. *The Westminster Magazine*, 1781, 21-22. の3記事が挙げられる。この3記事はステュアートの生誕年の誤り（1712年10月21日としている）や、ステュアートの帰国の日付けの誤り（1763年を1766年としている）など、内容的に同一である。MS1は3者を酷評しているけれども、第3の *Westminster Journal* (?) はある程度の評価をしている。ただ残念なことにこの記事の完全な見本は BL にすら現存しないのである。

②人名辞典の項目としては、*The General Biographical Dictionary*, London, 1816, by Alexander Chalmers. *Dictionary of National Biography*, London, 1888, by Leslie Stephen. *The Biographical Dictionary of Eminent Scotmen*, Glasgow, Edinburgh and London, 1855, by Robert Chambers. の3種が検討されているが、シャムレーによると第一のものは重要でなく、第二のものも内容に乏しい。最後に評価されるのが『コルトネス文書』以外の第一次資料にもとづくチェインバーズということになる。そこではステュアートの幼なじみのアリグザンダー・トロッタとステュアートとの死後の出会いに関するエピソードまでもが組み入れられている点が特徴的である。

③まとまった「ステュアート伝」とは、The writings of Lord Buchan. George Chalmers, Anecdotes of the life of Sir James Steuart, Baronet. *The Coltness Collections*, 1608-1840. The memoirs of Sir James and Lady Frances Steuart. の4種である。

まずステュアートの甥バハン伯は、以下のようなステュアート伝を発表している。Sketch of the late Sir James Steuart Denham, Baronet, in *The Bee*, Sept. 14, 1791. The outline of Steuart, in *The Anonymous and Fugitive Essays of the Earl of Buchan*, vol. 1, Edinburgh, 1812. The Memoirs of the Life of Sir James Steuart Denham, Baronet, by the Right Hon. the Earl of Buchan, in *The Edinburgh Magazine*, 204-209, and *The Transaction of the Society of Antiquaries of Scotland*, vol. 1, 129-139. 最初のものについては、すでに『チャーマーズ文書』中の①で紹介したが、シャムレーによるとこれはステュアートの処女作『ニュートン年代記の擁護 *Apologie du sentiment*

↘ I. Macnaghten, *Family Roundabout*, Edinburgh and London, 1955. やすでに挙げた Taylor 編 *The Stuart Papers*. への参照を求めている。

de Monsieur le Chevalier de Newton sur l'ancienne chronologie des Grecs』の英語版序文として作成されたものであった。シャムレーは John Rae や Stenhouse を援用しつつバハンの一筋縄ではゆかない性格を紹介し、ステュアートの死後出版になる小冊子 *A plan for introducing an uniformity of weights and measures within the limits of the British empire*, 1790. が献呈されたのが Lord Barrington であったのか、それともバハン⁽⁴¹⁾伯であったのかという点を問題としている。だからといってシャムレーはバハンを疑うわけでもない。バハンは MS1 が取り落とした情報も組み入れている。例えば彼がステュアートの正しい出生年を示したり、『ニュートン年代記の擁護』にかかわる Deshoulières なる人物を知っていた点にも注目するのである。

ただこれによって、異国の研究者であるわれわれとしては、ステュアートの同時代人が提供する情報にも慎重な取り扱いが必要な場合もある可能性もないこともないという教訓を得るのである。

つぎに『ステュアート著作集』全6巻の最終巻に付された『ステュアート伝』であるが、周知のようにこの版のどこにもチャーマーズの名前は登場せず、タイトルに息子の名前が出ていただけである。⁽⁴²⁾だがシャムレーはこの『著作集』の仕事の主導権はチャーマーズが握っていたが、原稿の所持者であったステュアート将軍自身がこの作業に積極的ではなかったし、現にチャーマーズは MS1 の存在を知らされず、MS2 についても返却を強く迫られていたことが BM⁽⁴³⁾所蔵のチャーマーズ書簡から伺われると言う。チャーマーズの仕事は総じて評価すべきものだとしつつも、シャムレーは彼とても誤りを免れていないと述べる。例えば彼は、アリグザンダー・トロッタについて MS2 の一節を改ざんしている。また、ステュアートの形而上学や宗教に関する取り扱いもステュアートに内在的とは言えないといった判断を下している。

伝記的記述の第3として検討されるのは、『コルトネス・コレクションズ, 1608—1840年』所収のキップスによる「ステュアート伝」である。

1842年に公刊されたこの『コルトネス・コレクションズ』は、公刊当時のコルトネス家に関する古文書から構成されている。この家系は1837年のステュアートの一人息子の死亡によって直系が途絶えたのだが、18世紀末から19世紀初頭に設立されたスコットランドの歴史愛好家協会の一つメイトランド・クラブ Maitland Club の後援によってそれが活字にされたものであって、編集者つまりメイトランド・クラブの構成員、James Dennistoun of Dennistoun は、

(41) *Edinburgh Magazine* ではバハン宛てとなっている。この点については、拙稿 [1990-a], 7 ページを参照。

(42) この「ステュアート伝」のオーサiershipについては、使用された資料のいくつかについてまだ疑問点も残っているが、渡辺 [1990-b]を参照せよ。

(43) このチャーマーズ書簡は日付けなどの同定がシャムレーによっては示されていない。

ステュアート家とも少なからず縁のある人物であった。⁽⁴⁴⁾

Dennistoun は MS1 と訂正の施された MS2 を所持していたが、キップスのテキストを原状回復した上で MS2 を公刊した。だが MS1 の場合の欠陥が除去されているとしても、公刊されたテキストはオリジナルとは異なると判断される。シャムレーが1例として本書の第2部に復刻した原文の多くはキップスによって削除されたものであった。⁽⁴⁵⁾

『コルトネス・コレクションズ』はそれ以外に赦免の手続きに関する書類のようなものも復刻している。⁽⁴⁶⁾

最後に検討されるものは、*Original Letters from the right honourable Lady Mary Wortley Montagu, to Sir James & Lady Frances Steuart; also, Memoirs and Anecdote of those distinguished persons*, Greenock, 1818. 所収のものであるが、これに対するシャムレーの判断には少し疑問がなくもない。シャムレーはこの回想録の著者をステュアートの息子のステュアート将軍としているのだが確定的な根拠はあげられていない。この『書簡集』⁽⁴⁷⁾の編纂には息子の助力があったということには同意できるのだが、シャムレーはそれを MS2 に注意深く従ったステュアート伝であるとしている。シャムレーは多くの点でこの伝記が明らかに息子によって提示された補足的な論点を提供するものであるとしているのだが、確かにステュアート一家の個人的な事柄が多く語られているのは事実であるとしても、それが息子によるという明示的な証拠は見当たらないのである。⁽⁴⁸⁾

以上のようなシャムレーの伝記的記述の検討についていえば、ささいなことながらその検討の順序に問題はないのだろうか。第1のバハンはステュアートの近親者であり、その公刊が彼の死に最も近いということから認めることはできるが、おそらくはチャーマーズによっても使用されたと思われるキップスは第2番目に検討すべきではなかっただろうか。その公刊の順という点が挙げられるなら、キップスよりも公刊が早かった『書簡集』の付録の「ステュアート伝」の方を先に処理するべきだったろう。

以上シャムレーが発掘・検討したステュアート伝に関する手稿類を紹介してきたが、本書の第1章の末尾の第3節の「失われた資料と保存された資料の欠落」と題する節をも検討したあとで、ここで簡単にまとめを行ないたい。

(44) シャムレーは本書で CC の383ページを参照というが、387ページの誤りであろう。

(45) 本書112ページ以下を参照。

(46) この点私は未確認である。

(47) 念のため本書の概要を示せば、すべてレイディ・メアリからステュアート夫妻宛の27通の書簡と『ステュアート夫妻の回想録』と4点の付録からなっている。4つの付録のうちの1つはすでに述べられた Seville, 1737年3月5日付け Thomas Calderwood 宛のステュアートの手紙、1つはこれもすでに1)のB)で述べた Attempt を活字にしたものである。

(48) 本書113ページに復刻。

III. 資料群の散逸の問題

A) 散逸した資料について

1) 以上のような検討の結果シャムレーは、原資料のいくつかは消失したと判断するが、それだけに、多くはないにしても失われた情報が期待できる前述の *Westminster Journal* が重要視される。

同じことはヨリ確かな情報源である書簡類についても言えるのだが、その例としてモンタギュ夫人からステュアート夫妻に宛てた手紙は残存するが、ステュアートの出した手紙がほとんど保存されていない。またステュアートと親しい関係にあった Hamilton 公の文書の中にもそうしたものが残されていない。

この点について CC の第 4 部に収められているステュアート伝に存在する「おびたしい彼〈ステュアート——渡辺〉の書簡と他の一家の文書から詳細なことを多く追加するのは容易である」(CC, p. 376) という記述を念頭におけば、19世紀半ば以降に関係書簡類が消失してしまったのかもしれないと推定できるのである。⁽⁴⁹⁾

2) 『チャーマーズ文書』には、〈レイディ・メアリが皇帝〔どこの国の皇帝かは不詳—渡辺〕の個人教師としてステュアートを推薦したこと、おそらくはステュアートの生涯に関する書類が Sir Jas. S. Denham からキップスに送られたけれども彼の採用するところとならず、Lumisden jr. によってパリに送られた〉とチャーマーズが記した原稿があるくらいだが、これからもいくつかの混乱が生じている。ここに言う Jas. S. Denham とは誰か、Lumisden とはだれか？ などということである。この点について判定を下すだけの材料もいまのところわれわれは持ち合せていない。

B) 現存する資料について

書簡を除けば満足の行く資料は存在しない。派生的な文献〈シャムレーは MS2, *Coltness Collections*, *Anecdotes by Chalmers* をこのように称する〉を離れると、MS1 やエルコの日誌が残っている資料だが、前者はステュアートの結婚以前の時期について暗いのに対し、エルコの方の情報は大体において正確であるとシャムレーは判断する。

こうしてシャムレーは、最善の資料を提供しているのは、ステュアート自身を始めとする彼の親類筋の人たち〈シャムレーを代弁すると、妻、息子、親友、義理の兄弟、いとこの一人、彼の甥たち、つまりフランシス夫人、ステュアート将軍、アーチボルド・ハミルトン、エルコ卿、エリザベス・ミュア、バハン伯達ということになる……渡辺〉であり、その対局には沈黙を守っている友人たち、例えばメアリ・モンタギュ夫人がいると判断するのである。

(49) Raynor & Skinner [1994] は、その後に失われた書簡の一部の最発見と見なせるのかもしれない。

IV. 小 括

すでに紙数も尽きたので、ここで以上の限りで簡単なまとめを行っておきたい。

シャムレーは基礎的資料を丹念に後付け、また収集を行ったけれども、その材料をスキナーのように伝記的ならびに理論的ステュアート論にまとめあげることにはなかった。しかし、地の利で勝るスキナーにいくつかの点で乗り越えられた部分もないではないが、以上の簡単な紹介でもわかるようにわれわれのような異国の研究者にとっては現在でもステュアート研究の着実な立脚点であるといえることができる。

とくに重要と思われるのは、ⅡのBで行われた伝記類の分析かもしれない。もちろんわれわれと言えども、ステュアートの不幸な政治的命運のことを知らないわけではないから、伝記作家が彼のジャコバイトとの関係に慎重である可能性に無関心ではないが、われわれはステュアート没後の大小の伝記をつぶさに検討し、その裏付けとすべき資料の当否にまで目を配りつつ、その立場・力点の相違・誤りなどまで析出するなどと言うところまで考えるに至っているとは言えないだろう。こうした点にまで目を開いてくれたのは本書の最大のメリットの一つかもしれない。⁽⁵⁰⁾

(1995.7.31. 稿)

＜主要参考文献＞

- Anderson, William [1870], *The Scottish Nations; or the Surnames, families, literature, honours, and Biographical History of the People of Scotland*, Edinburgh & London, 1870.
- Buchan [1972] *The Memoirs of the Life of Sir James Steuart Denham, Baronet, by the Right Hon. the Earl of Buchan, in the Transaction of the Society of Antiquaries of Scotland*, vol. 1, 129-139, 1792.
- Burton, John. H. [1849], *Letters of Eminent Persons addressed to David Hume*, Edinburgh & London, 1849.
- Chalmers, George, [1805], *Anecdotes of the life of Sir James Steuart, Baronet.*, in the 6th vol. of Steuart's *Works* (1805).
- Chambers, Robert [1855], *The Biographical Dictionary of Eminent Scotmen*, Glasgow, Edinburgh and London, 1855.
- Dennistoun, James [1842], *The Coltness Collections, 1608-1840*.
- Dunlop, John [1818], *Original Letters from the right honourable Lady Mary Wortley Montagu, to Sir James & Lady Frances Steuart; also, Memoirs and Anecdote of those distinguished persons*, Greenock, 1818.
- 原田哲史 [1991] 「ヘーゲル経済思想の源泉(1)」, 『四日市大学論集』3-2, 1991年3月。
- 同 [1992] 「ヘーゲル経済思想の源泉(2)」, 『四日市大学論集』5-1, 1992年9月。
- Historical Manuscripts Commission [1925], *Reports of the Laing Manuscripts*, reserved in the University of Edinburgh, published by His Majesty's Stationery Office, London, 1925,

(50) 真実一男先生は今年度末で本学の定年を迎えられる。貧しいながら本稿を先生に対する饞とする。いまわが国の大学は何度目かの転換期にある。本学ならずともその将来は予断を許さないものがある。大学の来し方、行く末を見る時、先生を代表とするいわゆる旧制大学終了者からの教えに接することができた私たちは幸福だったと言えるのかもしれない。先生ご夫妻のますますのご健康を祈念つつ、今後の精進に努めたい。

vol. 2.

川島信義〔1975〕「『J. スチュアート全集』の発刊とジョージ・チャーマーズ」, 西南学院大学『経済学論集』10-1。

小林 昇〔1989〕『小林昇経済学史著作集Ⅻ』, 1989年, 未来社。

Robinson, Mari(ed.)〔1985〕, *The Concise Scots Dictionary*, Aberdeen, 1985.

Raynor, David. & Andrew Skinner〔1994〕, Sir James Steuart: Nine Letters on the American Conflicts, 1775-1778, *The William and Mary Quarterly*, 3rd Ser. Vol. LI No. 4, Oct. 1994. *Selections from the Family Papers preserved at Caldwell*, 1854.

Sen, S. R.〔1957〕, *The Economics of Sir James Steuart*, Cambridge, Mass., 1957.

Skinner, Andrew〔1966〕, Sir James Steuart *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, edited and with an introduction by Andrew S. Skinner, Edinburgh and London, 1966.

Steuart〔1805〕, *The Works, Political, Metaphysical and chronological of the late Sir James Steuart of Coltness, bart.*, 1805.

渡辺邦博〔1990-a〕「G. チャーマーズまでのJ. スチュアート」, 福島大学『商学論集』58-4, 1990年3月。

渡辺邦博〔1990-b〕「『ステュアート小伝』のオーサーシップをめぐって」, 奈良産業大学『産業と経済』5-2, 1990年9月。

渡辺邦博〔1994〕「『コルトネス文書』について——ステュアート関係資料の予備的考察——」奈良産業大学『産業と経済』9-1, 1994年6月。

山崎 怜〔1977〕「キャンバスネイサン」, 小林 昇『小林昇経済学史著作集Ⅴ』, 1977年, 未来社の付録。